

雑木林で立っていた

U氏が、はじめてその女を見たのは、まだ幼い子供の頃のこと。
祖母に手を引かれ保育所に通う道すがら、近道としてよく通った雑木林。
小径の途中、鬱蒼とした茂みを覗いた先に、女は立っていた。
ほとんど全裸に近いような格好で、ぼんやりと、なにをするでもなく。
自分には見えているのに、祖母がその女に気付いたことは一度もない。
それ故、子供ながらに、あれはきつとお化けの類だ、とわかった。
祖母と雑木林を歩くたび、彼は必ずその姿を確認した。
女は、雨が降っても雪が降っても、同じ姿で、ただ立っていた。

女の背後に、お墓のような石積みがあることに気付いたのは小学生の時。
当時は、ソロバン教室や書道教室などに通う際、その雑木林を通っていた。
何年経っても変わらぬ姿で、女は立ち尽くしている。

うなだれもせず、かといって堂々とした様子でもなく、ゆらゆら。
不思議と、恐怖は感じなかった。

幽霊と呼んで差し支えない格好だが、存在感は植物のよう。
興味に駆られ、近づいてみるべくした試みは、全て失敗に終わった。
林の小径を一步でも踏み外すと、その女はスツと見えなくなるのだ。
同級の友人たちを連れて行ってみても、誰一人女には気付かない。
やはり自分だけに見える女なのだ、U少年はそう思った。

中学に上がると、毎日のように女を見ることができた。
規定の通学路ではなく、あえて雑木林を通り抜けて学校へ向かう。
思っていたより随分若いのではないか？　そういうことに気付きもした。
目を凝らし、表情や局部を確かめようと頑張ったが、ハッキリしなかった。
臃なそれを眺め、劣情を催したことも一度や二度ではない。
心霊写真がブームになった際には、インスタントカメラで撮影してみた。
しかしそこに写っていたのは、女の背後にある石積みのみ。
カメラでは認識できない存在なのだとなり、いわゆる心霊写真を疑問に思った。
一体どうして、あんな所に立っているのだろう、女への興味は深まるばかり。

高校では社会部に入った。

女の背後にある石積み由来を調べようと思いついたためである。調査の結果、どうやら近隣の寺が管理しているらしいとわかった。

訪ねた寺の住職は、あれは墓で、既に途絶えた家のものであると言う。

それで過去帳をあたって見たが、あの女と思われる人物は見当たらなかった。

一体何者なのだろう、なぜ自分にだけ見えるのだろう。

何か宿命付けられたものでもあるのかと、頻繁に雑木林に通った。

同じ場所で姿かたちも変わらず、まるで空間に照射された映像のような女。

手を尽くすも、結局彼女の素性を暴くことはできなかった。

進学が決まり地元を離れることになった際は、心ばかりの花を手向けた。

大学生になってからは日々忙しく、数年間地元に戻れなかった。

勉強に遊びにアルバイト、そして恋愛、やることばかりが増えた。

やがて、あの女を思い出すことすらも、なんだか気恥ずかしくなった。

他の人間には見えないのだから、あれはどう考えても幻覚の類。

そんなものに十年以上も囚われ続けた自分自身が、最早いたたまれない。

すっかり都会慣れし、芋臭さもなくなった、ある日のこと。

不意にもう一度、あの女の姿を見ておきたいという気持ちになった。

それは抑えがたい衝動で、一刻も早くあの雑木林に向かわなければと焦るほど。

思い極まったU青年は帰郷を決意し、故郷に戻ると着いた足で雑木林へ向かう。

しかしその場所で、彼は呆然と立ち尽くした。

女の姿がどこにもない、それどころか雑木林そのものが無くなっていた。

目の前には、重機に蹂躪された工事現場があるのみ。

既に例の墓石も取り除かれ、女の立っていた場所がどこであったのかもわからぬ有様。

考えてみればおかしかった、あまりにも突然、降って湧いたようなあの衝動。

どこかで、繋がっていたのかも知れない。

だからこそ、今生の別れをああい形で自分に伝えたのではないか？

そうであれば、やはり、あの女は確かにそこにいたのだ。

幻覚でも妄想でもなく、きつと、何か、思いを持って。

語り終えた後でU氏は言った。

「月並みだけど、失って初めて気付くものって、あるんだよね、やっぱり」